小論文　　慶應義塾大学　文学部　1/2

＜総括＞

試験時間　90 分	総解答字数　760 字

課題文の長さや設問の形式は、基本的には、例年の傾向と変わらない。設問Ⅰでは課題文の全体を対象とした要約を行う。設問Ⅱでは指定のテーマに即して自分の考えを論述する。内容は「文学」論である。人間にとって文学を読むとはどういうことであるのかをめぐって考える。課題文を読解してまとめる力、また、与えられたテーマに関して、自分なりに考える力や表現力などが試されている。

＜課題文の分析＞

大問番号	
内　容 （主題）	文学を読むということ
出　典 （作者）	沼野充義「それは君が何をどう読むかだ――地図のない〈世界文学〉の沃野に向けて」、『現代思想　2024 年９月号　特集：読むことの現在』青土社、2024 年
長短・ 難易等 前年比較	長短（短い・やや短い・変化なし・やや長い・長い） 難易（易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化）

＜大問分析＞

大問	出題形式	ﾃｰﾏ･課題文の内容	設問	設問形式	解答字数	コメント（設問内容・論述ポイントなど）
	課題文	学部系統的	Ⅰ	要約	300 ～ 360 字	この文章を要約する。
			Ⅱ	論述	320 ～ 400 字	人間にとって文学を読むとはどのようなことか、この文章をふまえて、自分の考えを述べる。

※出題形式は「テーマ・課題文（英文を含む場合は付記する）・図表・その他」
※テーマ・課題文の内容は「一般教養的・学部系統的・教科論述的・その他」
※設問形式は「論述・要約・説明・分析・その他」

© 河合塾　2025 年

小論文　　慶應義塾大学　文学部　2/2

＜答案作成上のポイント・学習対策等＞

課題文は、世界文学にどのように向き合うかについて書かれたものである。世界文学とは、日本や欧米先進国で書かれた文学はもちろん、ラテンアメリカ、アジア、アフリカなど世界中のいたるところで、それぞれの土地の言葉で書かれた文学のことである。そうした世界文学は圧倒的に膨大で多様であるのだが、著者はこうした多様性を楽しむことができなければ「生きている甲斐がない」と述べる。

そのような課題文において、著者が言いたいのは、「できるだけ沢山外国語を学ぶ努力をし続けながら、同時にできるだけ沢山翻訳で読むことが必要だ」ということだろう。そして、沢山の世界文学を読んで、「多様性と普遍性」（異質性と同質性）の間を往復することが重要だというのである。

設問Ⅰは、課題文の全体を対象とした要約問題である。著者が何を主張するのかを適切に理解した上で、課題文の論点を整理し、うまく議論の流れを押さえることができるとよい。ただし、制限字数がある点には注意が必要である。「300 字以上 360 字以内」という条件に収まるように、字数のコントロールをしっかりと行わなければならない。なお、今回の課題文では、全体の流れをつかむことに少し困難を覚えたかもしれない。全体的に、論理的な整合性よりも、関連する論点の紹介に重きがおかれた文章だからである。

設問Ⅱは、課題文の内容（設問Ⅰでまとめた論点）をふまえて、人間にとって文学を読むとはどのようなことか、自分の考えを論述する問題である。課題文をまったく無視して自分の考えを勝手に書いてもいけないし、逆に、課題文に書かれていたことをそのまま写すだけでもいけない。あくまでも課題文の論点を応用することを念頭に、自分なりに具体例を挙げて、その分析を通して議論を展開することが大切である。

ただし、そうは言っても課題文の論点をどれだけふまえればよいのか迷うかもしれない。というのも、課題文では最初から最後まで「世界文学」について書かれていたのに、設問文では「世界」がなく、ただの「文学」になっているからである。もっとも「世界文学」と言われても多くの受験生には挙げるべき具体例が思いつかないということもあるかもしれない。「世界」のない「文学」が問われているとはいえ、しかし、課題文の論点を活かして議論することは必須である。

また、設問文には「人間にとって」という言葉がある。この言葉をどう受け止めるのかという点についても確認しておこう。まずは、個人の文学体験にだけ閉じこもらずに、これを相対化し、より広い文脈において捉え返して意味付け直すことが必要だろう。さらに、課題文において、「人間」は「機械」や「ＡＩ」に対置されていた。つまり、生身で苦労しながら外国語を読む存在といった感じである。どちらかに限定する必要はないが、自分がどのようなイメージで答案を作成するのか意識しておけるとよいだろう。

なお、大学の狙いははっきりしないが、原文であれ翻訳であれ、外国語の文学を読むことの意義を「人間」を見据えながら「自分」の立場から論じていけばよい。何も高尚な文学作品でなくてよい。少しは馴染みのある英米の文学でもよい。外国語と日本語とのズレなどに留意しながら議論を進めてみたい。あるいは、夏目漱石の文学作品をとりあげて、それを世界文学として位置付け直してみてもよい。

いずれにしても、「具体例勝負」と考える必要はない。「多様性と普遍性」などの課題文の論点に留意し、苦労して外国語や文学作品と葛藤する「人間」の意識や価値観の揺らぎや創造性、あるいは、翻訳の可能性や不可能性などをめぐって論じることができるとよいだろう。

学習の対策としては、教養の幅を広げつつ、現代的な諸問題をめぐって考える力を鍛えていくことが大切である。もちろん今年度に出題された内容が次の年度にも同じように出題されるとは考えづらい。よって、ここ数年の過去問に向き合い、何が試されているのかを丁寧に確認していく作業が不可欠である。また、自分で考えたことを言葉として表現する力も必要であるのだから、日常的に書く訓練もしていきたい。

© 河合塾　2025 年